
綾乃ちゃんと煉くんの災難

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾乃ちゃんと煉くんの災難

【Nコード】

N7843M

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

風の聖痕の二次創作です。原作は未完のまま終わりましたが。

（前書き）

ネタバレあります。ご注意ください。

「継承の儀を再び……？」

父である重悟の前で、綾乃は素っ頓狂な声を上げる。意外な事実を伝えられたとは故、宗主である父の面前でそのような態度を取るの
は、相応しくないといえた。

「でも、誰と？ まさか和麻！？」

今から四年前。綾乃と和麻は神風家に伝わる呪法具、炎雷覇を賭けて、継承の儀を行った事がある。結果は綾乃の圧勝であった。
しかし、あれから四年の歳月を経て、和麻は圧倒的な力を身につけて帰ってきた。風の精霊王と契約を行い、コントラクター＜契約者＞最強の風術師として帰ってきたのだ。その力は絶大であり、炎雷覇を持った綾乃ですら、敵う事はない、力の差を思い知らされた。
今闘えば、敗北は必至だろう。だが、風術師である和麻が炎雷覇を使う事は敵わないはずだ。風術師では、炎の精霊は応えない。第一、神風と決別したあの男が、神風に戻ってくる気もないだろう。

「じゃあ、まさか！？」

次に綾乃が思い浮かべた人物は、和麻の父でもあり、重悟と同じく神炎使いである、厳馬。

しかし、炎雷覇は若い世代が継ぐべきと勇退を申し入れた厳馬が、再び炎雷覇に固執するとは、その性格からしてありえないと思えた。
「そのどちらでもない」

重悟は答える。

「じゃあ」

思い当たる人物は、一人しかいなかった。だが綾乃にとって、その人物を敵にするとは夢にも思わなかった。

「綾乃。お前が闘う相手は」

「僕が姉様と……？」

煉は悲鳴にも似た、声を上げる。

「だとさ。頑張れよ、煉。俺のリベンジマツチ」

和麻は軽薄な笑みを浮かべ、そう言ってみせた。

「だって。相手は姉様ですよ。敵うわけじゃないじゃないですか」

「そうでもない。お前が思っている程、綾乃との力の差はない。あいつには炎雷覇という圧倒的なアドヴァンテージがあるから、そう思えるだけだ。実際、あいつとの実力は肉薄しているさ。でもなければ、再び宗主が継承の儀を行うわけがないだろう」

ここ最近の煉の成長具合は、和麻もよくわかっていた。あの事件以降の急速な成長は、綾乃を上回っているとさえ思わせる事も、多々あった。四年前はまだ幼子と言って良かった煉も、一人前の炎術師と認められた、だから宗主は、再び継承の儀を行おうと決めたのだ。

「けど」

煉は今にも泣き出しそうな表情を浮かべる。元々気の優しい性格だ。相手が自分に害する敵ならばまだしも、姉と慕っている綾乃なら、尚更闘う事などできない。その煉の優しさは、強さでもあり、弱さでもあった。

「まあ、そう泣き言を言うな。俺だって逃げ出したかったさ。けど、こいつは神風で行われる正統な儀式だ。神風にいる限り、逆らう事は出来ない。わかるな、煉」

和麻は諭すように言う。炎に対する適性のなかった自分。神風から出て行かざるを得なくなった、きっかけとなった儀式。その儀式を、今度は弟である煉が行おうとしている。和麻は忌忌しきものを感じざるを得なかった。

「はあ」

煉は諦めたように、重い溜息を吐く。

「試合は一週間後だ。それまでせいぜい、腕を磨いとくんだな」

「煉と試合……?」

学校で、友人である由香里は声をあげた。

「誰だっけ、それ？」

由香里の言葉に、綾乃はずっこけそうになるが、なんとか踏み止まる。よくよく考えれば、由香里は煉と会った事はないはずだ。由香里のネットワークなら知っていても不思議ではない、という気はしたが。

「和麻の弟よ」

「ああいったワイルドなタイプなのか？」

しばし思考し、もう一人の友人である七瀬は尋ねた。

「ううん。全然。あいつとは正反対よ。大人しくて従順で、可愛いタイプなんだから」

「ああ。なんか構いたくなっちゃうタイプ？」

由香里は笑みを浮かべながら、尋ねる。

「そうね。あんまりにも可愛いから、からかったり、苛めてやりたくなる時もあるわね」

その煉と闘うのか。好戦的な綾乃でも、流石に気が引けた。

「お姉さまと闘う？」

学校で、花音は尋ねる。その名に相応しい、可憐な少女である。

「うん。ほんと、嫌になっちゃうよ」

煉は友人の前でも珍しく泣き言を漏らす。

「けど、勝ったら煉君が、その、炎雷覇とかいうのと、お家のトッブになるんでしょう？」

「無理だよ。僕が姉様に勝てるわけないよ」

「そんな事ない。煉くんならできる。じゃあ、こうしましょう。これから気分転換に、私とお茶に行かない？」

「何勝手に決めてるんだ鈴原。煉はこれから俺とゲーセンに行くんだ」

中学生とは思えない大男　芹沢が現れた。小学校の頃からそうだったいがみ合いが、恒例のように行われようとしている。

二人は睨み合う。それはいつもの事で、煉も周囲の人々も馴れきつ

ていた。二人の喧嘩中、煉は上の空で、虚空を見つめていた。
結局その試合の勝者は花音だった。

「じゃあ、はじめるか」

煉の前には、和麻がいた。

「本気でやるんですか？」

煉は怪訝そうに尋ねる。

「勿論、本気じゃない。手加減はするさ」

本気ではないとはいえ、兄である和麻との手合わせ。風の精霊王と契約したコントラクターであり、自らが尊敬し、目標ですらある。その相手に、煉は畏怖を覚えざるを得なかった。

「じゃあ、いきます」

煉は炎の精霊を呼び出した。呼びかけに精霊が答え、黄金色の炎が煉の体を纏い始める。輝くばかりの、黄金の炎。その炎は見る者を魅了する、美しさがあつた。

そして、煉は数瞬間を置く。躊躇っているのだろう。

「遠慮するな。全力で撃つてこい」

「では うあああああああ！」

鼓舞するような叫びと共に、煉は炎を放った。少なからず、意識化において放てる全力の炎。全てを焼き尽くさんとする、黄金色の炎が、和麻に猛進していく。和麻は避ける事も試みず、悠然とその炎を受け入れた。

しかし。炎は和麻の手前で分断される。和麻の呼び出した風の精霊は、盾となり、術者を守る。超一流の風術師である和麻にとって、空気の流れを変え、炎を防ぐ事など造作もない事だった。無論、和麻は周囲への影響も考え、空気から酸素を消し、炎の燃焼を抑えた。炎は何事もなく消えていく。煉は炎を出しつくす。大分力を使つたのか、肩で息をしていた。煉は自らの炎がやすやすと防がれたのに、軽いシヨックを覚えたのか、落胆した様子だった。
(まだまだだな……やはり火力なら綾乃に分があるか)

和麻は冷静にそう分析していた。煉も強くなっているとはいえ、綾乃もまた何もしていないわけではない。彼女もまた、確実にレベルアップをしている。勝機はやはり薄いとは思えた。何より煉の性格だ。綾乃の前では、全力を出す事さえ難しいだろう。どんな時でも非情に徹せれない。力以前に、それが和麻と煉の最大の差だった。何とか、試合当日煉に本気を出させる手段はないだろうか。煉には執着がない。炎雷覇にも、宗主の座にも、興味がないだろう。しかし、全力を出させないまま試合を迎えても、それは和麻にとって面白いものではなかった。全力を出した煉が、綾乃にどこまで通用するのか、それは和麻にとって、実に興味深いものだった。

和麻は煉に全力を出させる方法を考え、しばし思考する。そして、案が思いついた。他人のコンプレックスを土足で踏みにじるのは気が引けたが、他に方法も思いつかない。

「あいな 煉」

「なんですか？ 兄様」

「実はな、綾乃がな」

耳打ちするように囁かれた言葉で、煉は表情を変えた。滅多に浮かべない怒りの表情だ。

「本当ですか？ 兄様？ 姉様がそんな事を？」

「ああ。間違いない」

「 姉様」

煉は恨み言のように呟き、怒気を高める。感情の激情。それこそが炎の精霊を操る源であり、炎術師に必要な資質、煉に欠けているものだ。それに答え、炎の精霊は力強く踊り出し、煉の体に纏う。

（こいつは面白くなってきたな）

和麻は表情には出さないが、内心笑みを浮かべていた。

本気の煉と綾乃が闘う。和麻にとってこれ以上はないシチュエーションだった。

試合前日。

「何のようだ？ 宗主？」

重悟に呼び出された和麻は、そう尋ねた。

「明日の継承の儀だが、もしその時は」

「ああ。心配するな。わかっている」

重悟の言葉を遮るように告げ、和麻は踵を返した。

「待て。報酬はいらんのか？」

和麻は重悟からの依頼を受け取る時、必ず報酬の話をする。和麻が報酬を要求しないのは稀だった。

「別にいいさ。最初からそのつもりだった」

和麻はそう言い残し、その場を去った。

「……俺にとつては、どっちも失うわけにはいかないんでね」

和麻は独り言のように、呟く。

（そう、もう誰も失わない。それだけの力が、今の俺にはある）

全てを護り切るだけの力が。もう、あの時のように失わない為に、手に入れた力がある。

試合当日。

神風家の敷地。そこに、炎雷覇は飾られていた。台座に飾られていた、朱色の剣。神々しいまでに、紅い輝きを放つ炎雷覇は、見る者を圧倒するような力があつた。

神風家の宝具である、炎雷覇。それと次期、宗主の座を賭けて、両雄が対峙していた。

一人は綾乃であり、もう一人は煉である。

「では、これより継承の儀を始めろ」

試合の審判を務めるのは、現宗主である重悟。

「煉、いっとくけど手加減は不要よ」

綾乃は煉にそう告げる。これは正統な儀式である。手加減をするような甘さを持つていては、儀式を真剣に遂行できなくなる。無論、

煉の性格からは甘さは捨て切れそうにはないとは思ったのだが。

「わかってます姉様。僕は手加減する気はありません。姉様こそ、相手が僕だからって手加減しないでくださいね？」

「なっ……」

煉に似合わない好戦的な台詞に、綾乃は絶句する。何が煉をそうさせるのか、煉を纏う炎の精霊は躍動的で、思わず吞まれてしまいそうだ。それに負け時と、綾乃も気を高めていく。

そして、両雄は睨み合い。炎の精霊がせめぎ合う。炎と炎が絡み合い、全てを燃やし尽くさんとする。そして、緊張が最高に達した時。「始め！」

重悟の声で、試合は切って落とされた。

（炎の精霊よ……）

綾乃は精霊の力を高めていく。精霊は友であり、手足でもある。思えば徒手空拳で闘うのも久し振りだ。炎雷覇を通さず、炎の精霊と直接触れ合う感覚にも、新鮮さを覚える。

（我に力を！）

綾乃は炎を放った。相手を焼き尽くそうとする、紅蓮の炎。炎は煉に突き刺さる。煉に突き刺さった炎は、火柱を上げる。

（少し強すぎた？）

普段から炎雷覇によるゴリ押しを得意とする綾乃は、炎の制御が得意ではない。常に最大火力で敵を燃やし尽くすのが、彼女の戦法だ。火力だけならば、敵馬と重悟にも劣らないだろうが、制御という一点から見れば、彼女はまだまだ未熟であった。

故に、強すぎる火力で、煉を焼いてしまったのではないかと危惧した。無論、煉もまた炎の精霊の加護を得ている。死ぬような事はないだろうが。

と。

突如として、火柱が消えた。

「なっ？」

綾乃は驚愕しながらも身構える。

「その程度ですか？ 姉様」

煉は悠然とした態度でそう言った。見下したような目は、和麻には似合っても煉には似合わない。

（精霊の主導権を取られた？）

綾乃の放った炎、その精霊は、煉に服従した。精霊を操る力、それは精神の力。それは、煉に精神で負けているという事を意味した。

「今度はこちらから行きます。はっ！」

小さく圧縮された炎。しかしその数は無数。

無数に放たれた炎は、散弾銃のようにいくつも打ち出され、対象を射抜こうとする。

「このっ！」

綾乃は跳躍し、その炎をかわす。今の煉から精霊の主導権を取る事は、困難だ。なぜかそういった予感がした。今日の煉はいつもとは違う。

（許せない……）

純情な煉が、こうまで綾乃に対して憎悪を抱くのは初めてだった。

（許せない）

胸中で反復する。その度に、滅多に歪まない煉の表情は歪んだ。憎悪。その感情に応えるように、炎の精霊は唸りを上げる。

きっかけは和麻に告げられた言葉だ。本当だとしたら、許すわけにはいかない。

継承の儀など関係がない。炎雷覇も、宗主の座も興味がなかった。

だが その事だけは許すわけにはいかなかった。

「炎の精霊よ！」

煉の呼びかけに、炎の精霊は力強く応える。

「全てを燃やせ！」

ありとあらゆる空間で炎が具現化し、雨のように降り注いできた。

「な、なによそれ？」

視界全てを覆う炎。それが綾乃の見たものだった。黄金色の炎は、隙間なく断続的に振ってくる。避けようがない。喰らわざるを得なかった。

綾乃は歯を食いしばり、来るであろう衝撃に備えた。

煉は勝利を確信した。自分が持てる最大限の火力だ。全てを包み込むような炎は、空を覆い、綾乃を捕らえた。そして、焼き尽くすまで放さない。

だが、数瞬したところで、炎は消えた。

「げほ、げほ。死ぬかと思っただわ」

綾乃は蒸せながらも、無事だった。服は所々焼けている。特殊な呪法が施されている制服だ。それが焼かれているだけでも、驚嘆すべきだったのだが、煉には物足りない結果だった。殺すつもりこそないが、全力で放った炎で、しとめ切れなかった。

「くっ！」

思わず煉は舌打ちをする。

「あああ~~~~！」

綾乃は驚いたように叫び声を上げる。

「髪が、髪が燃えてる〜」

綾乃の長い髪、その所々は焼けていた。綾乃は慌てて、炎を払うが、焦げ跡は残った。綾乃にとっては、髪が燃えるなどという事態は初めてだった。それ故に、初めて炎で無残にも焼かれた髪を見て、彼女は嘆かざるを得なかった。

「煉〜！」

憤怒の表情。綾乃が煉に向けた表情の仲で、最も恐ろしい、まるで悪魔のような表情だった。類稀な美貌を持つ綾乃だからこそ、その表情は際立って恐ろしかった。思わず、煉は恐怖に怯んでしまう。

「女の子の髪を一体なんだと思ってるのよ！」

綾乃を纏う炎の精霊の数、密度は煉のそれを遥かに上回っていく。

「馬鹿――！」

その単純な一言に乗せて、綾乃は炎を放った。奇しくも放たれた炎は、紅色をしていた。意識的には放てないが、和麻が紅炎と名付けた綾乃の炎。紫炎の重悟、そして、蒼炎の敵馬と同じ、神炎を綾乃は持っていた。輝かしい紅色の炎は、煉を包んでいく。その鮮やかな色合いは、全てを滅殺するだけの威力があるとはとても思わなかった。

「うあああああああああ！」

煉は思わず悲鳴を上げる。炎の精霊の加護を得た自分でも、これ程の炎は耐え切れる自信はない。無事では済まないだろう。死という感覚をこれ程まで身近に感じた事はなかった。そして、覚悟をしたように、煉は瞳を閉じる。

風が通り抜けた。数瞬してもやってくるはずの痛みも、熱さもこない。風が煉を、優しく包み込む。

煉が瞳を開けると、紅色の炎は、目の前で分断されていく。風の護りだ。

絶対的な意志の元、風の精霊が、空氣に熱を伝える事を許さない。目の前で紅色の炎が通り抜けていく。しかし、熱さも何もこない。ただただそれは幻想的で、不思議な光景だった。

炎は通り過ぎた。何事もなかったかのように。煉は空を見上げる。そこに兄　和麻はいた。風の精霊を制御し、和麻は空に浮いている。

ただ、煉には見て取れた。和麻の両眼が、蒼穹に染まっている事に。蒼穹の如く澄み渡った瞳、それは、コントラクター＜契約者＞の証。風の精霊王と契約した、和麻が、その力を使う時のみに、瞳はその色をする。その時の和麻の前には、全ての風の精霊は従う事になる。精霊を完璧に制御する為に、その力を開放していたのだ。神炎すら断絶するだけの精霊を制御する為には、数瞬では間に合わない。きっと、最初から助ける為に、それだけの準備をしていたのだ。どっちがそうなのでもいいように。

「……僕の負けです」

煉は悟り、そう告げた。兄の加護がなければ、自分は死んでいたかもしれない。完璧な敗北だった。

「まっ。よくやったな、煉」

地面に降りてきた和麻は、煉の頭を優しく撫でる。

「それと、綾乃もだ」

「なによ。あんたに褒められても全然嬉しくないんだから」

綾乃はぷんと顔を反らす。それもいつもの事だ。和麻はさして気にも止めない。

「それより、煉があれだけ本気になるなんて驚いたわ」

「……それは、姉様の責任です」

「はあ？」

綾乃は心底心当たりがないようで、呆けたような声を上げる。

「姉様が、僕のあゆみちゃんフィギュアを壊したりするから」

「……何それ？」

「とぼけないでください。姉様が、僕の大事にしていた、メーカーに特注で作らせたあゆみちゃん一分のーフィギュア巫女服バージョンを壊したりするから」

「フィギュア？ あたし、そんな事してないわよ」

「え？」

綾乃の言葉に煉ははつとする。そして、自らの兄を見据えた。

「兄様、どういう事です？」

「あ。いや。この前お前の部屋に入ったら、部屋に薄らでかい不気味な人形があつたもんだから、思わず風の精霊を呼び出して、粉砕しちゃってさ。な」

「兄様」

綾乃に向けられていた怒気が、今度は和麻に向けられた。

「待て。煉、話せばわかる」

その迫力に押され、和麻は後ろにじりじりと下がっていく。

「兄様！」

声を張り上げ、身近にあった凶器　炎雷霸を引き抜いた。絶大な力を秘めた、朱色の剣。それを令、煉が手にした。そして、振り上げた。

「僕のあゆみちゃんフィギュア一分の一巫女服バージョンを返せー
ー！ー！」

炎雷霸から放たれた炎は、コントラクターとしての力を解放した和麻でも防ぎきれない程の、熱量、意志が込められていた。空を覆い、全てを焼き尽くそうと怒れ狂う、太陽が振り注いでくるような炎が、和麻を包み込んでいった。

余談だが、その一撃で、屋敷は半壊したらしい。

「出でよ。炎雷霸！」
シーン。

という音がしそうな程、綾乃がその御霊も呼んでも、何も起こらない。

「ちよつとお！　何でよ炎雷霸！」

綾乃は嘆きの声を上げる。

「優れた呪法具程持ち主を選ぶ。炎雷霸も、煉の事が気に入ったんだろ」

冷静に、和麻は呟く。珍しく、体の随所には包帯が巻かれている。

「何よそれ？」

「実際、最後の一撃は見事だったぜ。あれだけの炎を喰らった事は今までなかった」

コントラクターとしての力を持ってしても防ぎきれない炎。例え炎雷霸を用いたとしても、それは驚嘆すべき事実だった。

「じゃあ、これからあたしはどうすればいいのよ？」

「さあな。炎雷霸がお前の事を認めるのを待つしかないんじゃないか？　今の煉にはまだ、炎雷霸を服従させるだけの力があるわけもないし」

「そうなあ」

綾乃は涙目になった。

「お願い炎雷覇。帰ってきて〜」

綾乃の悲鳴は、屋敷中に轟きわたった。

後日談だが、煉は和麻からあゆみちゃん一分のフィギュアワンピースバージョンを買って貰う事で、満足したらしい。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843m/>

綾乃ちゃんと煉くんの災難

2010年10月28日08時04分発行